武甕槌大神
經津主大神
岐神

平篤胤謹書

往昔くも畏し、武甕槌大神、經津主大神はしめ、神代の昔、天照大御神、高皇産霊尊の詔命以て、葦原中津御国に降し給へる、岐神を導とふて、記紀に載る神達を、悉く平らけく、打掃ひ給へるに依りて、皇孫尊命天降り給ひて、平らけく安らけく、治め給ふ事、天下知食事と成給るは、偏に此二柱の大神の御功績にしてやうく、常陸国鹿島宮、下総国香取宮に鎮座ます岐神も、其御事に、遠き遠き、遠祖より、銀り給へる事ハ、皇典及び社伝に詳なれハ、今更に、枚挙に及ハず、天津天の下、平土瑞穂国の、はしめの御徳を、崇らさるべき、誠に大皇国の正心男と、有らん者ハ、朝に夕に、此大神等に、御代の幸を、祈りて、我が、皇国の、皇威を、志記敬心振起して、仕へ奉ぶべき、武士の道に、有る、然るに、世に、異国風の、邪神なる、武道の、祖神と、崇く、由に、依て、祖と、崇ぶ、邪神なる、有りき、狂学に、堂に、入り、此大神等を、封じ、奉り、甚もに、忘しく、敬も、忘れ、記紀事に、載る、依て、及ぶ、我が、先人、早くより、神の御国の、武道を、以て、本根と、為し、大事を、以て、枝葉と、為し、本末を、弁へ、古伝、を、閑に、し、大皇国風を、教諭さるに、付ては、又、殊更に、御国の、学を、図、奉るべき、ものは、此御号を、白らの、書に、手本、添き、本、ふる、柱軸の、有る、を、今度、改めて、必、模写し、奉る、清水記板に、彫る、を、以て、同志、人に、伝へ、ぼ、と、願ふ、ものなり、広く、世人、真の、日本、知る、今、と、ぞ、ぐは、仕へ奉る、小記、

慶應二年丙寅歳十一月　平篤胤謹書

往古くも畏し。　武甕槌大神、經津主大神はしめ、神代の昔、
天照大御神、高皇産霊大神の詔命以て豐葦原中津御國に降り給ひ、
岐神を郷導とあて荒振る神等を掃平らけ、打撃を給へるに依りて、
皇孫命天降り給ひて平らけく安らけく堅磐に常磐に天下知食る事
と成ぬるは、專こ此三柱の大神の御功績にしてやうく常陸國鹿島宮、
下総國香取宮に鎮り給ひ、岐神も其近辺なる息栖社に鎮り給へる事は、
皇典及び社傳に詳かれば今更に枚挙に及ばず、淳天の下卒土の濱誰か
此の御德を蒙らざるべき殊に大皇國の正心男と有らむ者て、朝に
夕に此大神等に御霊の幸を乞ひ祈りて其業を努め勤しみ國に皇に忠
志敏心振起して仕へ奉るべし、眞に武士の道には有べる、然るに子世に異
なる悪しき審神者ら、武道の祖神と崇く由なるは、祖とも思と必云ひて
方々に狂業にて、寔に此大神等に對ひ奉り、甚もかしこく最も忌々しき
事ぞ有らば、爰に我が先人い早くより神の御國に武道を以て本根と爲
し、文事を以て枝葉として、我が本學の弟子等に古傳の趣を開示し、大皇
國風を教諭さるに付ては、又殊更に御霊の幸を願奉ると忌まはる淨
はる、此御号を自ら書て、手本齋き奉られさる拝軸の有るを、今度畏みく
も模寫し奉る、清い紀拝形を先て、同志の人々に傳へば、眞氣に、
弘く世人り眞の旨を知ら令むとかくは仕へ奉る小弟子。

慶應二年丙寅歳十一月　平阿昌美鉄胤齋謹書

東国三社御神號

多
1526
3